

を積みて、泊りの波も遠淺となり、船の出入もよろしからずとて、又數年を経て、今の高砂といへる所へ、家どもを移し、同所ながら高砂尾上と相別ちて、隔事八丁計也、相生の松は、天正の頃、羽柴秀吉、三木城別所小三郎を責る時、小三郎救ひを毛利輝元に請ふ、即藝州より小早川隆景、吉川元春、兩大將にて、總勢三万餘騎、兵船二百餘艘、明石郡魚住の浦に著き、糧を三木城へ運送の後詰の爲に、總軍今の尾上高砂の邊りに陣を取り、かの松を伐て、箒とす、夫より枯朽て、慶長九年、領主池田輝政の沙汰として、枯根の上に神祠を移し、左方に鐘樓を建てけり云云、後又祠の良に移す

〔古今和歌集十七〕題まらず

藤原おきかせ

たれをかもゑる人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

〔謠曲〕高砂

ワキ、詞 抑是は九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とは我事也、我いまだ都をみず候程に、此度思ひ立みやこに上り候、又よき次なれば、播州高砂の浦をも一見せば、やと存候、○中所は高砂の、上歌尾上の松も年ふりて老の波もよりくるや、木の下陰の落葉かくなる迄命ながらへて、猶いつまでかいきの松、それを久しき名所哉、ワキ詞 里人を相待處に、老人夫婦來れり、いかに是成老人にたつぬべき事の候、シテ詞 こなたの事にて候か、何事にて候ぞ、ワキ 高砂の松とは何れの木を申候ぞ、シテ 唯今木陰を清め候社高砂の松にて候へ、ワキ 高砂住の江の松に相生の名有、當所と住吉とは國をへだてたるに、何とて相生の松とは申候ぞ、シテ 仰のごとく古今の序に、高砂住の江の松も相生の様に覺えとあり、去ながら、此尉は津の國住吉の者、是成うばこそ當所の人なれ、ゑる事あらば申さ給へ、○中ワキ 謂を聞ば面白や、扱々さきに聞えつる相生の松の物語を、詞 所にいひ置いはれはなきか、シテ 詞 昔の人の申しは、是はめでたき世のためしなり、シレ 高砂といふは上代の萬葉集のいにしへのぎ、シテ 住吉と申は、今此御代に